

令和8年度全国学力・学習状況調査 鳥取県の結果について

令和8年8月6日
小中学校課

令和8年4月20日（月）から23日（木）にかけて実施した全国学力・学習状況調査に係る本県の調査結果について、以下のとおりご報告します。

1 令和8年度全国学力・学習状況調査のポイント

（1）調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、
- ・全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 - ・学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
 - ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（2）結果公表について（文部科学省発表資料から）

○国による結果公表は、以下のとおり3段階に分けて行われます。（令和7年度～）

7月16日（木）	結果公表①（正答率・IRT（※1）バンド分布などの全国平均）
8月3日（月）	結果公表②（全国データに基づく分析結果）
9月以降（秋頃目途）	結果公表③（都道府県・指定都市別データに基づく分析結果）

（※1）IRT（Item Response Theory）：項目反応理論。児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。
なお、詳細は6ページ【参考】参照。

○このように3段階で公表される目的は以下のとおりです。

- ・児童生徒の学びへの還元を最優先に、学校への結果返却の時期を前倒しとする。
- ・全国データに基づく分析結果をより効果的に発信する。
⇒これまでは同時期に全国データに基づく分析と都道府県・指定都市別の平均正答率が公表されていたため、後者に注目が集まり、本調査の目的に基づいて国が発信しているメッセージ（1（1）調査の目的）が十分に届かない状況も見受けられた。
- ・都道府県・指定都市別データの公表までに各都道府県・指定都市の主体的な分析期間を確保する。
⇒都道府県・指定都市が自らの調査結果を公表する時期については、公表データを主体的な分析に基づいて説明することができる準備が整ったタイミングとすることが望ましい。

＜鳥取県の分析及び公表の方針＞

- 令和7年6月6日付けの文部科学省からの通知では「各都道府県・指定都市教育委員会において、自らの調査結果を分析するに当たっては、（略）個々の問題等に着眼して学習指導上の課題を把握したり、質問調査の結果と合わせて総合的に分析したりすることが重要である。」とあり、「これを踏まえた主体的な分析により、（略）教科調査の全体の平均正答率・スコアのみならず、（略）調査結果を多面的に解釈することができる示し方となるよう工夫することが期待される」と示されている。
- 令和8年7月28日（火）に実施された、結果公表②に係る文部科学省の記者レクにおいても、都道府県・指定都市教委に対して、調査結果を多面的に解釈することができる示し方となるよう依頼していること、都道府県・指定都市教育委員会による公表日及び公表内容については教育委員会に委ねており、主体的な分析を行った上で、9月以降に公表されることも想定していることなどについて、説明されている。

以上のことを踏まえ、今回の本県の調査結果においては、各教科の特徴的な問題や課題等を示しました。

また、教科調査の詳細な分析や今後の取組については、市町村教育委員会と連携して、検討・実施していく予定です。

（3）CBT（※2）方式での実施

昨年度の「中学校理科」に続いて、今年度は「中学校英語」がCBT方式で実施されました。IRTが採用され、生徒1人あたり公開問題10問と非公開問題12問の計22問が出題されています。公開問題には全日程に共通する問題7問と、実施日により異なる問題3問があります。非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いています。

（※2）CBT（Computer Based Testing）：コンピュータ使用型調査

2 本県の実施状況

(1) 小学校6年

実施校116校(小学校110、義務教育学校6)

教科等	国語	算数	質問調査
人 数	4,208	4,206	4,279

(2) 中学校3年

実施校60校(中学校50、分校2、義務教育学校6、特別支援学校2)

教科等	国語	数学	英語	質問調査
人 数	4,091	4,089	3,918	4,097

3 全国における「教科に関する調査」の結果のポイント(文部科学省発表)

(全体)

- ・都道府県別の平均正答率・スコアのばらつきの状況は、狭い範囲に収まっている。

(国語科)

- ・小学校では、文章を引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題が見られた。
- ・中学校では、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにするに課題が見られた。

(算数・数学科)

- ・小学校では、立方体の体積の求め方の理解や、基準量、比較量、割合の関係を正しく捉えることに課題が見られた。
- ・中学校では、2直線が平行になる条件の理解に課題が見られた。

(英語科)

- ・社会的な話題に関して読んだことについて、自分の考えを書くことはできているが、その理由を書くことに課題が見られた。
- ・日常的な話題について、自分がしたいことを話すことはできているが、その理由を話すことに課題が見られた。

4 本県における「教科に関する調査」の結果のポイント

(全体)

- ・国語、算数・数学の正答数の分布については、全国と同様の傾向が見られた。

(国語科)

- ・小学校では、つながりや配列を意識して、文章全体の構成や展開を考えることに課題があると考えられる。
- ・中学校では、話し合いの状況を捉えることに課題があると考えられる。

(算数・数学科)

- ・小学校では、基礎的な算数の概念理解や、問題を統合的・発展的に考えることに課題があると考えられる。
- ・中学校では、基礎的な数学の概念理解や、数学的に説明することに課題があると考えられる。

(英語科)

- ・基礎的な言語事項についての知識や実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能に課題があると考えられる。

5 本県における各教科の特徴的な問題 ()内は全国平均(公立) ※問題の詳細は別紙参照

(1) 国語

<小学校>

- ① 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる問題(思考・判断・表現) 鳥取県正答率:78.4%(76.4%)

- 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる児童の割合が多い。
- 文章を読んで理解したことに基づいて、文章から言葉や文を取り上げ、自分の経験と結び付けてまとめる力が身に付いていると考えられる。

- ② 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができるかどうかをみる問題(思考・判断・表現) 鳥取県正答率:54.6%(57.9%)

- 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えるために、それぞれの段落の内容を考え、読み手が理解しやすいように工夫することに課題があると考えられる。
- 「考えと理由や事例」、「原因と結果」、「疑問と解決」などとのつながりや配列を意識して文章全体の筋道を整えていくなど、文章全体の構成や展開を考える学習場面を設定することが重要である。

<中学校>

- ① 文脈に即して正しく漢字を書き、語句を文章の中で使うことができるかどうかをみる問題（きのこをとる、多数決をとる、ボールを落とさずにとる、美しい山並みをとる）（知識・技能）

鳥取県正答率：34.7% (39.8%)

- 出題された漢字を正しく書いたり、語句を文章の中で適切に使ったりすることに課題があると考えられる。
- 文や文章の中で正しく漢字を書き、適切に語句を使えるようにするためには、漢字や語句を文章の中で使うことを通して、漢字や語句の量を増すとともに、それらについての理解を深めることが重要である。

- ② 互いの立場や考えを尊重しながら話し合い、結論を導くために考えをまとめることができるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：48.3% (52.7%)

- 話し合いの状況を捉え、結論を導くために考えをまとめることに課題があると考えられる。
- 結論を導くために考えをまとめることができるようにするためには、互いの考えを捉える中で見いだした共通点や相違点、新たな提案などを踏まえて話し合うよう指導することが重要である。また、話し合いの状況を捉えて話し合いが進展するような発言かどうかを判断する場面を設定することも大切である。

(2) 算数・数学

<小学校>

- ① 示された2つの表から、集計に誤りのある項目を見付け、その根拠を表の中の数と言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：58.9% (56.2%)

- 2つの表から合計の人数が一致しているかを確認し、その誤りを表から読み取った根拠を基に記述することができている児童が多い。
- 資料を分類する際に、落ちや重なりがないか調べたり、集計にあたって誤りがないか確かめたりするなど、誤りが起きないように方法を工夫する力が身に付いていると考えられる。

- ② 日常生活の問題を解決するために、図形を構成する要素に着目して直方体の3つの辺の長さを捉え、示された条件を基に、調べたい数量の求め方を数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：40.6% (45.2%)

- 宅配便の送料を箱の3つの辺の合計から求める場面で、問題文に直接的に示されている長さを用いて、示されていない長さを見いだすことができていることが予想される。図形を構成する要素に着目し、根拠を基に筋道を立てて考えたり、統合的・発展的に考えたりすることに課題があると考えられる。
- 図形の性質や構成の仕方を考える際には、観察や構成などの活動を繰り返して図形の性質を見付けたり、図形の性質を確かめたりすることができるようにすること、図形の計量の仕方について考える際には、図形の性質を基に考えることができるようにすることが重要である。

<中学校>

- ① 累積度数の意味を理解しているかどうかをみる問題（知識・技能）

鳥取県正答率：49.2% (46.0%)

- 全校生徒の睡眠時間の度数分布表から必要な情報を読み取り累積度数を求める問題で、累積度数の意味や求め方を理解している生徒の割合が比較的多いと考えられる。
- データの傾向を的確に捉え、事象を数学的に解釈してデータの活用ができるようにするため、階級の度数、相対度数等と混同しないようにしながら、それぞれの意味を理解できていると考えられる。

- ② 同類項の意味を理解しているかどうかをみる問題（知識・技能）

鳥取県正答率：62.4% (70.5%)

- $7x + 9 - 5x + 7x^2 + 2x$ の式で $7x$ の同類項をすべて書く問題で、同類項の意味理解に課題があると考えられる。
- 同類項について理解することは、文字を使って数に関する性質を説明したり、方程式を解いたりする際に必要であるため、確実に定着させる必要がある。

(3) 英語

<中学校>

- ① 不規則動詞の過去形を理解し、その知識を活用して書く技能を身に付けているかどうかをみる問題（知識・技能）

鳥取県正答率：48.5% (58.9%)

- 動詞の過去形に関する知識の定着に課題があると考えられる。
- 基礎的な動詞の知識を実際のコミュニケーションにおいて活用する学習場面を設定する必要がある。

- ② 社会的な話題について、話を聞き、要点を捉えることができるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：46.0% (55.6%)

- 社会的な話題について、短い説明を聞き、話し手の最も伝えたいことを捉えることに課題があると考えられる。
- ある程度の情報が入ったまとまりのある説明などを聞き、より重要な情報は何かを判断する学習活動を設定することが必要である。

6 本県における「質問調査」の結果のポイント

【主な成果】

- ・「数学の授業の内容はよくわかる」「数学の勉強は得意である」と回答した生徒の割合や、「学習指導において、児童生徒一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫した」と回答した学校の割合が、昨年度を3ポイント以上上回った。
⇒各学校において、本時のねらいに即した適用題が実施され、教師が生徒の学習状況を丁寧に見取ることで、個に応じた指導や支援の充実が図られていることが考えられる。
- ・「PC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理することができる」と回答した児童生徒の割合が、昨年度を2ポイント以上上回った。
⇒各学校において、収集した情報を整理・分析し、課題解決につなげる探究的な学びの視点からの授業改善が進んでいることが考えられる。

【主な課題】

- ・授業で、「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動」を行っていたと回答した児童生徒の割合が、昨年度を2ポイント以上下回った。また、昨年度に引き続き、授業で自分の考えが上手く伝わるよう、工夫して発表することに課題が見られた。
⇒「自分の考えを持ち、工夫して表現する子どもの育成」のための指導のポイントについて示した資料「鳥取県教育の重点」を活用し、授業改善を推進していく必要がある。
- ・「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている」と回答した児童生徒の割合が、昨年度を2ポイント以上下回った。
⇒児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりを一層推進していく必要がある。

※上段：小学校、下段：中学校

項目	内容（○：児童生徒質問調査、●：学校質問調査）	R8 値	R7 値	昨年度比
生徒指導	○自分には、よいところがあると思う	84.4 84.0	86.8 85.0	-2.4 -1.0
	○先生は、自分のよいところを認めてくれていると思う	92.5 92.2	94.5 93.5	-2.0 -1.3
	○困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる	69.6 74.2	70.8 75.0	-1.2 -0.8
	○国語の授業の内容はよくわかる	79.9 74.8	79.9 74.9	0.0 -0.1
授業改善	○算数・数学の授業の内容はよくわかる	74.7 70.0	75.2 65.3	-0.5 +4.7
	○英語の授業の内容はよくわかる（中学校のみ・※R5 値、※※R5 値との比較）	— 59.0	— 62.4※	— -3.4※※
	○授業で、各教科で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行った	70.9 71.6	75.2 74.2	-4.3 -2.6
	○授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表した	57.1 58.2	58.8 59.0	-1.7 -0.8
	○分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができた	76.6 76.9	79.5 79.1	-2.9 -2.2
	○PC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理することができる	65.9 70.4	63.6 67.1	+2.3 +3.3

ふるさと キャリア 教育	●学習指導において、児童生徒一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫した	85.4 85.0	82.1 73.8	+3.3 +11.2
	●全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用した	99.1 96.6	95.7 93.1	+3.4 +3.5
	○将来の夢や目標を持っている	81.2 67.3	83.8 65.2	-2.6 +2.1
	○地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う	79.4 74.1	80.5 75.7	-1.1 -1.6
	●コミュニティ・スクールや地域学校協働活動等の取組によって、学校と地域や保護者の相互理解が深まった	95.7 85.0	97.5 91.4	-1.8 -6.4

7 本県における「教科に関する調査」の状況

教科調査平均正答率（％）・平均ＩＲＴスコア（中学校英語のみ）

	国語		算数・数学		英語(3技能)	
	本県（公立）	全国（公立）	本県（公立）	全国（公立）	本県（公立）	全国（公立）
小学校6年	60	60.9	55	56.4		
中学校3年	60	63.9	53	57.0	469	499

※文部科学省は、平成29年度より小数点以下を四捨五入し整数値で公表している。

※ＩＲＴスコアとは、ＩＲＴに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの。

※英語については、現段階では3技能（聞くこと・読むこと・書くこと）のみの結果であり、4技能（話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと）の結果については、9月以降（秋頃目途）に教育委員会及び学校に提供される予定。

8 今後の取組

各教科において、知識・技能を問う問題に課題が見られた。基礎・基本となる内容をどのように身に付けさせ、活用の部分とどう融合させていくのかについて、引き続き市町村教育委員会と連携しながら授業改善に取り組んでいく。特に課題が見られた中学校の各教科については、各学校の状況を分析し、市町村教育委員会と協力しながら学力向上支援チームが授業づくりの伴走支援を行う。また、教育研究団体とも連携しながら、授業改善を図る。

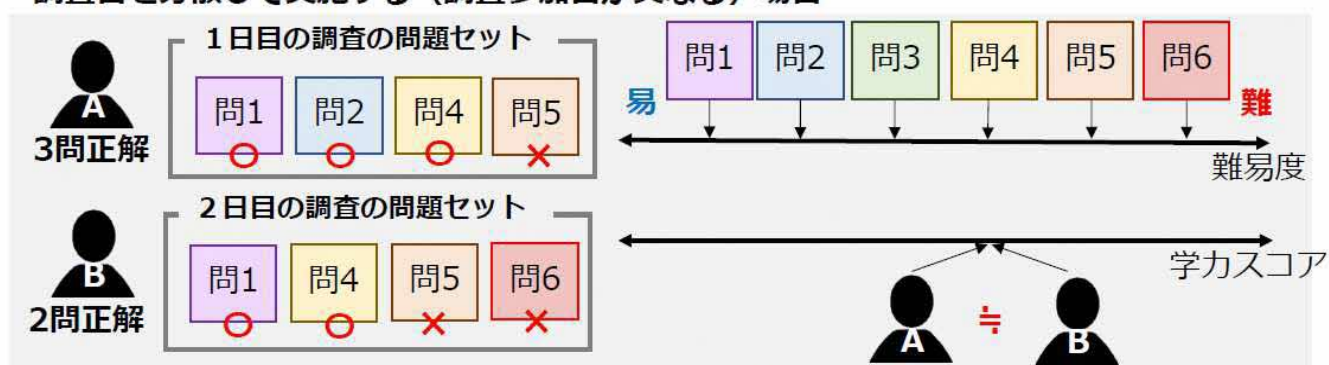
主な取組	内容
とっとり学力・学習状況調査、全国学力・学習状況調査を活用した授業改善	- とっとり学力・学習状況調査の結果を活用し、児童生徒の非認知能力や学習方略、昨年度からの児童生徒の学力の伸びを把握し、授業や学級経営に生かせるよう、その活用方法を情報提供し、PDCAサイクルの構築を支援する。 - 全国学力・学習状況調査で課題がある問題を基に、授業改善を図る方法について担当教員に周知するオンライン研修を実施する。
学力向上支援チームによる指導・支援	学力向上支援チーム（県指導主事、学力向上支援員）が支援を必要とする学校を訪問し、授業改善について直接指導する。
到達度評価問題及び活用問題集「B-PLAN」を活用した支援、授業改善	- 算数・数学について、到達度評価問題をCBT方式で実施し、学習内容の到達度を定期的に把握し、個に応じた適切な手立てを講じることができるようにする。 - 中学校国語・数学において、全国学力・学習状況調査の問題を基に作成した活用問題集「B-PLAN」を活用し、「わかる・できる」授業づくりを推進する。
中学校数学の学校訪問	県教育委員会の指導主事が全校を訪問し、授業改善のポイントを示すとともに、担当教員と授業づくりについて協議及び指導助言を行う。（令和7年度から継続実施）
教育研究団体との連携（中学校国語・数学・英語）	- 国語、英語については、教育研究団体と連携し、全国学力・学習状況調査の結果分析を踏まえた授業改善を図るための授業研修会を実施する。 - 数学については、中学校数学パワーアッププロジェクトとして、各域に拠点校を指定し、教科部会と連携して理論研修や授業研究会を実施する。

【参考】 CBT方式及びIRTについて

- ・令和8年度調査では、「中学校英語」において、ICT端末等を活用しオンラインでテストを受ける「CBT方式」で、複数日時で分散実施された。
- ・IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものを「IRTスコア」、IRTスコアを1～5の5段階に区切ったものを「IRTバンド」という。
- ・IRTスコア及びIRTバンドは、難易度の高い問題に正答していると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出される。
- ・これまでの悉皆調査では、各年度の問題の難易度を厳密に調整する設計とはしておらず、年度によって出題内容も異なることから、異なる年度の結果を単純に比較することは適当ではない。しかし、十分な数の問題を準備し、CBTで複数の問題セットを配信する方式をとる場合は、今までと同程度の問題数は調査期間終了後に公開することとし、それ以外の問題については適切に漏洩防止策を講じた上で非公開とし、次年度以降も出題する設計とすることで、IRTに基づき、各教育委員会や学校でも年度をまたいで児童生徒の学力を比較することも可能となる。
- ・令和9年度以降は全ての調査がCBT方式により実施予定。また、「教科に関する調査」のCBT方式では、IRTが採用される。
- ・本県においては、今回のCBT方式での実施に係るトラブルについては、特になかった。

【IRTに基づく調査のイメージ】

調査日を分散して実施する（調査参加日が異なる）場合



生徒Aと生徒Bは異なる問題セットに解答し、その正答数は異なるが、IRTに基づいて算出される学力スコアはほぼ同じと推定される。